

いろまちななか流れけり雪解川

田中裕明（『夜の客人』）

「雪解」は裕明鍾愛の季語である。句集には17句のみ収められている。春になって水が温みだすと感じる前の、山から降りてきたばかりの冷たい清冽な水である。

田中裕明は2003年4月号の「俳句研究」に「雪解川」30句を発表している。「句を作り金沢へ行こうと思う」と言っていたが、次に会ったとき、「金沢はいかがでしたか」とお尋ねしたところ、「行かなかったんです」との返事だった。仕事が忙しかったか、体調がお悪かったかと案じものだが、発表句には、金沢の味わいが濃厚で、まるで行ってきたみたいな作品であった。ほかには〈雪解の犀川ほとり魚を食ふ〉〈加賀暖簾春を刻める金時計〉〈金澤の止り木にして薄氷〉〈春しぐれ山すそひろき加賀の國〉などがあった。だから、掲句の「いろまち」は金沢であり、「雪解川」は犀川なのだろうけれども、裕明はそこに旅行者として立っているわけではない。吟行をして句帳を開いているわけでもない。頬杖ついて万年筆のキャップをとって、ちょっと斜め上あたりを見上げて、そうして心の翼を広げて詠んでいただろう。